



江別第一中学校区 めざす子ども像（15の姿）
 夢をいただき、仲間とともに
 未来をひらく子ども
 江別第一中学校 めざす生徒像
 「夢・目標に向かって自ら学び、対話を
 通して仲間とともに成長する生徒」
 令和 5年 7月 3日

「総合的な学習の時間」で、江別・札幌と小樽を知る

7月10・11日（火・水）2年生は札幌・小樽への「宿泊学習」、7月14日（金）1年生は「江別を知ろう」校外学習が行われます。実はこの2つの学習はつながりがあります。それは江別が発展した理由に関係します。小学校では郷土資料館で学んだと思いますが、鉄道も1つの視点になります。

明治になり、今の三笠市にある幌内で大規模な石炭の地層が確認され、貴重なエネルギーである石炭をどのようにして工場が多くある本州などの地域に送るか検討されました。その結果、小樽港と幌内炭鉱を鉄道で結ぶ案が採択され、1880年（明治13年）日本3番目の鉄道として小樽市内で一部開通。現在は函館本線、一部は手宮線跡として保存されています。開拓史があった札幌を経由し、江別には1882年（明治15年）6月に、さらに11月に幌内までが全通し官営幌内鉄道が開通しました。開拓使は、風が比較的穏やかで水が豊富な札幌におかれていました。

夕張でも石炭が採掘され、室蘭港から積み出しましたが、1930年（昭和5年）夕張から野幌まで夕張鉄道が開通し、小樽や札幌へ搬出するようになり、上江別に線路がひかれました。その跡地が「きらら街道」です。学校3階にある航空写真にも、グランド横にある線路が見られます。きらら街道と上江別13号道路交差点（山本歯科前）に「上江別駅」がありました。



←1955年、上江別駅付近（左上）に第一中学校を走行する夕張鉄道の旅客列車（写真：江別市郷土資料館）



↑3階中央にある航空写真 写真左下に線路が

王子製紙江別工場（当時は富士製紙第五工場、現在王子エフテックス江別工場）専用線は、1909年（明治42年）に運用が開始され、1986年に廃止されました。江別駅から旧江別小学校の西側にそって進み、一番町自治会館の裏、ホクレン江別給油所を通りました。国道12号線がS字カーブであったのは、踏切があった名残です。またその先国道と市道の間の緑地が、線路跡地となります。

北海道電力江別発電所専用線は1935年（昭和10年）に運用開始。江別駅から4丁目跨線橋より高砂駅寄りに、発電所（現在の北海道電力総合研究所）に石炭列車を通す引き込み線がありました。それが、現在の「四季の道」です。蕨屋書店の前には、その時の車両などが展示されていますね。



←
 青 江別発電所専用線
 橙 王子製紙専用線
 赤 夕張鉄道
 （写真：江別市郷土資料館『写真で見るえべつの鉄道』2017年7月）



↑ 1964年江別駅構内の北電江別発電所専用線の列車（写真：江別市郷土資料館）

江別の歴史を、農地、川、レンガや製紙、鉄道などの視点で分析する

江別には多くの遺跡があります。明治の開拓以前にも、多くの人の営みがあったことがわかります。学校周辺にも多くの遺跡があり、文京台にある北海道埋蔵文化財センターが情報の集積をしています。

縄文時代やアイヌ文化期の遺跡に江別チャシがあります。元江別の高台に鮭を干した跡もあり、段丘の下は海だったことがわかります。樺太アイヌが強制的に移住させられた歴史もあります。

江別開拓の歴史は、1878年(明治11年)には屯田兵10戸56人が移住し江別村が誕生、1886年(明治19年)には野幌にも屯田兵村ができました。同じく1886年(明治19年)には会社組織の北越殖産社が今の北広島市につづく野幌に入植しました。そして、農地が広がられてきました。

江別は千歳川が石狩川と合流する地点です。江戸時代までは太平洋と日本海がつながる場所でもあり、北海道開拓では石狩平野や内陸に向けた川による物流拠点でもありました。

開拓によって伐採された木材の利用と豊富な石炭、潤沢な水の存在から製紙工場が立地しました。良い粘土があり、消費地に近く、レンガ工場も多くありました。

1つの視点で江別を分析することで、深く理解することができます。

体験・探究活動で分析した事を繋げ、広げ、学びを深めよう！

「江別を知ろうまちあるき学習」では、27のチェックポイントがあります。一つひとつを掘り下げ理解することに加え、繋げて江別の町の成り立ちの理解を広げ、日本や世界の歴史につなげる深い学びにしてほしいと思います。

総合的な学習の時間の目標は「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていく」ことです。

国土地理院 1976年(昭和51年)

10月28日撮影空中写真 一

